

アフリカにおける民主主義の理念・制度・機能

— 4回のアフロバロメーター調査を中心として —

鈴木 亨 尚

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

はじめに

アフロバロメーターが第4回調査の結果を2009年5月から順次公表している。アフロバロメーターとは、アフリカの政治、特に、民主主義に関する代表的な研究者の1人であるブラットン (Michael Bratton) を中心として行われている新たな試みである。アフロバロメーターは、「選挙の実施や法の支配が民主主義体制の持続に重要であるのと同様に、大衆の態度や、それらをもたらす変化している政治文化もまたこれらの体制の長期的な運命を決定する上で重要な役割を果たしている⁽¹⁾」と考えている、独立した、無党派の調査プロジェクトであり、アフリカにおける新興民主主義国の人々の態度の国家横断的・時系列的なデータを収集・分析し、普及させることを目的として活動している。これは、民主主義発展センター (Centre for Democratic Development, CDD、ガーナ)、南ア民主主義研究所 (Institute for Democracy in South Africa, IDASA、南ア)、政治経済実証研究所 (Institute for Empirical Research in Political Economy、ベナン) をコア・パートナー (Core Partners)、ボツワナ大学政治・行政学部 (Department of Political and Administrative Studies, University of Botswana) など18機関 (各機関に1~3名のチーム・リーダー) をナショナル・パートナー (National Partners)、ミシガン州立大学政治学部 (Department of Political Science, Michigan State University, MSU、アメリカ) とケープタウン大学社会科学センター・アフリカ民主主義研究ユニット (Democracy in Africa Research Unit, Centre for Social Science Research, University of Cape Town) を支援ユニット (Support Units) とし、継続的に世論調査を行い、調査研究のための能力構築をし、幅広い範囲の使用者に調査結果を提供する。ブラットン (MSU)、ギマ=ボアディ (E. Gyimah-Boadi, CDD)、マテス (Robert Mattes, IDASA) がアフロバロメーターの創始者であり、開始時のディレクター (Director) であった。現在のディレクター (Executive Director) はギマ=ボアディ、副ディレクターはキニヤンド (Godbertha Kinyando, CDD) とロガン (Carolyn Logan, MSU) の2人である⁽²⁾。ブラットンは、現在、上級顧問 (Senior Advisor) を務めている。また、ミシガン州立大学政治学部は、当初、コア・パートナーの1つであったが、現在は支援ユニットの1つである。これらは、調査研究の権限のアフリカ側への移譲と理解できよう。なお、民主化研究で

著名なダイヤモンド (Larry Diamond)、元世界銀行副総裁顧問でタンザニアの中央銀行総裁を務めるンドゥル (Benno Ndulu)、ラテンアメリカ世論調査プロジェクト (Latin American Public Opinion Project, LAPOP) のディレクターであるセリグソン (Mitchell Seligson) ら 6 人が国際アドバイス委員会 (International Advisory Board) の委員を務めている⁽³⁾。また、現在実施中の第 4 回調査に対して、イギリスの国際開発庁 (Department for International Development, DfID)、デンマークの外務省、スウェーデン国際開発協力庁 (The Swedish International Development Cooperation Agency, SIDA)、アメリカ合衆国国際開発庁 (The United States Agency for International Development, USAID) が資金提供を行い、第 1～3 回調査に対しては、アフリカ開発銀行 (African Development Bank)、ミシガン州立大学 (Michigan State University)、オランダの外務省、ノルウェー開発協力庁 (Norwegian Agency for Development Cooperation, NORAD)、世界銀行 (World Bank) などが資金提供を行っている⁽⁴⁾。

アフロバロメーターは、テーマ別・国別に編集された『アフロバロメーター調査報告書』 (Afrobarometer Working Papers、ブラットンが編集長で、ギマ=ボアディ、ロガン、マテス、ワンチェコン [Leonard Wantchekon] が編集委員) を 1999 年から年 10 冊程度発行している。さらに、2002 年からは『アフロバロメーター速報』 (Afrobarometer Briefing Paper) を年 10 回程度発行している。これらは、アフリカ諸国の市民の民主主義、市場、市民社会、発展、その他の側面に対する態度に関するサンプル調査の結果を報告している⁽⁵⁾。

アフロバロメーター調査は、標本調査 (サンプリング調査) のうち確率標本抽出法 (無作為抽出法) であり、調査対象者が望む地域言語で、面接調査法で行われる。対象者は 18 歳以上の選挙権を有する者で、第 1 回調査では、合計 21,531 人がインタビューを受けた。国別では、レソトが最小で 1,177 人、ナイジェリアが最大で 3,603 人である。第 2 回調査では、合計 23,197 人がインタビューを受けた。国別では、ガーナ、セネガル、レソト、マラウイ、ザンビア、ボツワナ、タンザニア、ナミビアが最小で各 1,200 人、ウガンダ、南ア、ナイジェリアが最大で各 2,400 人である。第 3 回調査では、合計 25,397 人がインタビューを受けた。国別では、多くの国で約 1,200 人、ナイジェリア、南ア、ウガンダでは約 2,400 人である。ジンバブエはフィールドワーク実施上の制約から 1,048 人となっている。第 4 回調査では、合計 26,414 人がインタビューを受けた。国別では、多くの国で約 1,200 人、ナイジェリア、南ア、ウガンダでは約 2,400 人である。サンプル・エラーは、95 % 信頼区間で、1,200 人のサンプル数で最大プラス・マイナス 3 %、2,400 人のサンプル数で最大プラス・マイナス 2 % である。小数点以下は四捨五入されている。その結果、合計が 100 にならない場合がある。平均は各国同じウェイトで計算されている⁽⁶⁾。アフロバロメーター調査の概要は表 1 に示した。なお、アフロバロメーターでは、第 1 回調査で対象とした 12 か国に限定して、第 1 回から第 3 回までの調査結果を比較する報告書を作成している⁽⁷⁾。我々は、これを「12 か国レポート」と呼び、4 種類の概要レポートとともに参照していく。

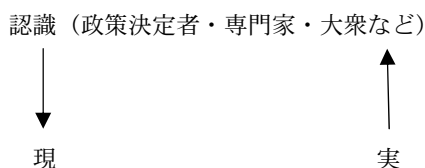
表1 アフロバロメーターによる調査

回数	時期	対象国	概要レポートの編集者
第1回	1999年7月 ～2001年 9月	ボツワナ、ガーナ、レソト、マラウイ、マリ、ナミビア、ナイジェリア、南ア、ウガンダ、タンザニア、ザンビア、ジンバブエの12か国	ロガンとマチェイド (Fabiana Machado)、両者はミシガン大学のアフロバロメーター・プロジェクト (Afrobarometer Project) のメンバー
第2回	2002年6月 ～2003年 11月	上記12か国に、カーボ・ヴェルデ、ケニア、モザンビーク、セネガルを加えた合計16か国 (概要レポート作成の時点では、ジンバブエでの調査は行われておらず、15か国を対象としている)	ブラットン、ロガン、チョ (Wonbin Cho)、パウアー (Paloma Bauer)、すべて、ミシガン州立大学の政治学・アフリカ研究センター局 (Department of Political Science and African Studies Center) に所属
第3回	2005年3月 ～2006年 3月	上記16か国に、ベナン、マダガスカルを加えた合計18か国	ロガン、フジワラ (Tetsuya Fujiwara)、バリッシュ (Virginia Parish)
第4回	2008年2月 ～12月	上記18か国に、ブルキナファソ、リベリアを加えた合計20か国 (概要レポート作成の時点では、ジンバブエでの調査は行われておらず、19か国を対象としている。さらに、ザンビアのデータは暫定的なもので、各々の表の平均はザンビアを含んでいるが、ザンビア自体の数字は示されておらず、文章中でもザンビアに関する詳細は示されていない。今後、ザンビアとジンバブエのデータを含む概要レポートの修正版が公表されることになっている。)	リテル (Eric Little) とロガン

(出所) The Afrobarometer Network, 2002, pp.1-2; The Afrobarometer Network, 2004, 頁番号なし [表紙の次の頁]; The Afrobarometer Network, 2006, Citizens, p.1; The Afrobarometer Network, 2009, pp.1-6 に基づいて筆者が作成。

アフロバロメーターのデータは、大衆の主観的認識に基づいている。アフロバロメーターは、「すべての人々は、その物質的環境がどのようなものであろうと、正確な観察と合理的な思考が可能である」と考えており、さらに、「認識は現実と同じくらい重要である。人々が事実であると考えていることは行動の中心的な動機付けとなる」と述べている。つまり、アフロバロメーターは、我々と同様、認識が現実を作り、現実が認識を作るという認識と現実の再帰性を認めている。図1はそれを示したものである。ただし、アフロバロメーターの議論はあまり明瞭なものではないので、我々自身の考えで整理している。例えば、アフロバロメーターは、フリーダム・ハウス (Freedom House) のデータを「より客観的で実証的観察」の例として示し、「現実 (reality)」の側に置いているように思われるが、これは適切ではない。フリーダム・ハウスのデータは、現実・事実ではなく、専門家の認識であり、アフロバロメーターのデータは大衆の認識であり、認識という点では違いはなく、違うのは認識の主体にある。これまで、専門家の認識に基づくデータ・分析は多くあり、重視もされてきた。これに対し、大衆の認識は十分にデータがなく、したがって、重視されてこなかった。アフロバロメーターのような各種「バロメーター」は、新興民主主

義地域の民主主義に関する初めての包括的データであり、ここに価値がある。しかも、政変や選挙による政権交代のような政治変動においては、大衆の認識は非常に重要であり、このようなところにアフロバロメーターの重要性がある⁽⁸⁾。



(出所) 筆者が作成。

図1 認識と現実

さらに、我々は、民主主義に対する認識は3つに分かれると考えている。第1に、民主主義の理念に対する認識である。アフロバロメーターは、これを「民主主義に対する支持」という用語などで示している。第2に、民主主義の制度に対する認識である。アフロバロメーターは、これを「民主主義の程度」という用語で示している。第3に、民主主義の機能に対する認識である。アフロバロメーターは、これを「民主主義に対する満足」という用語で示している。これら3つは、現実との間に再帰性を持つと同時に、三者間においても相互に影響を与えると我々は考えている。

本稿は、主に、4回にわたるアフロバロメーター調査のデータと分析に依拠して、アフリカ諸国の民主主義の理念・制度・機能を検討することを目的としている。第1節では民主主義の理念を、第2節では民主主義の制度を、第3節では民主主義の機能を検討する。第4節では民主主義の理念・制度・機能の関係について検討する。そして、最後に議論を整理し、将来を展望する。

第1節 民主主義の理念

アフロバロメーター調査は、「民主主義はその他のいかなる体制よりも望ましい (democracy is preferable to any other kind of government)」の全体に対する割合を「民主主義に対する支持 (support for democracy)」として示している⁽⁹⁾。

第4回調査の対象20か国のうち、ジンバブエを除いた19か国に関し、「民主主義に対する支持」は70%である。最上位はボツワナ(85%)、以下、ザンビア(83%)、カーボ・ヴェルデ(81%)、ベナン(81%)、最下位はマダガスカル(39%)、以下、レソト(46%)、ブルキナファソ(58%)、モザンビーク(59%)となっている⁽¹⁰⁾。

「12か国レポート」の対象国からジンバブエを除いた11か国に関し、時系列の比較をしてみると、第1回調査から第3回調査にかけて、低下傾向にあったが、第4回調査では、第1回調査の水準を上回っている⁽¹¹⁾。すなわち、民主主義の理念に関する認識は10年前の水準を回復した。

「民主主義に対する支持」に関し、国別にデータをとると表2のようになる。第1回調査と比

較して、マリ、マラウイ、南アなどで支持が上昇し、タンザニア、ウガンダ、マラウイ、ボツワナで第3回調査から支持を大幅に上昇させている。一方、タンザニアとナイジェリアは、第1回調査と比較して支持を大幅に低下させている。なお、第3回調査から支持を大幅に低下させた国はない。

ダイヤモンドは、「民主主義に対する支持」に関し、3分の2を超えることが民主主義の定着の最低限の閾値、70～75%となることがより説得力のある指標であると述べている⁽¹²⁾。これに従えば、第4回調査はこのような水準に達しており、調査対象国は、全体として、民主主義の定着という段階に達しつつあると言えるかもしれない。

表2 民主主義に対する認識

(民主主義に対する支持、民主主義の程度、民主主義に対する満足) (単位:%)

	第1回調査			第2回調査			第3回調査			第4回調査			変化		
	支持	程度	満足	支持	程度	満足	支持	程度	満足	支持	程度	満足	支持	程度	満足
ボツワナ	85	82	75	75	70	66	69	73	59	85	91	82	0	+9	+7
ガーナ	77	69	54	82	76	71	75	71	70	78	83	80	+2	+14	+26
レソト	40	37	38	50	48	48	50	44	40	46	37	30	+6	0	-8
マラウイ	65	62	57	64	38	47	56	28	26	74	56	57	+9	-10	0
マリ	60	45	60	71	63	63	68	58	57	72	60	49	+12	+15	-11
ナミビア	58	71	64	54	60	69	57	73	69	64	73	67	+6	+2	+3
ナイジェリア	81	50	84	68	32	35	65	28	26	72	42	31	-9	-8	-53
南ア	60	60	52	57	47	44	65	64	63	67	48	49	+7	-12	-3
タンザニア	84	50	63	65	63	63	38	39	37	72	74	71	-12	+24	+8
ウガンダ	80	48	62	75	53	50	61	49	51	79	54	47	-1	+6	-15
ザンビア	75	63	59	70	48	54	64	32	26	83	66	48	+8	+3	-11
ジンバブエ	71	27	18	48	36	37	66	14	14	-	-	-	-	-	-
平均	69 (70)	55 (68)	58 (61)	62 (66)	53 (54)	52 (55)	61 (61)	48 (51)	45 (48)	71	62	56	+1	-6	-5

(出所) The Afrobarometer Network, 2002, p.17, Table 1-6 : Satisfaction with Democracy; The Afrobarometer Network, 2004, p.37, Table 3.4: Supply of Democracy; Annie Chikwanha, Tulani Sithole and Michael Bratton, *The Power of Propaganda : Public Opinion in Zimbabwe, 2004 (Afrobarometer Working Paper, No.42)*, p.16, Table 13 : Extent of Democracy; (以下、「Zimbabwe」と表記); The Afrobarometer Network, 2006, Where, p.17, Table 2.2. Support for Democracy; Afrobarometer, No.40, p.7, Figure 8 : Extent of Democracy, 2005-2006 and p.8, Figure 9 : Satisfaction with Democracy, 2005-2006; Afrobarometer, No.67, p.5, Figure 1 : Support for Democracy, 19 Countries, 2008, p.9, Figure 5 : Perceived Extent of Democracy, 19 African Countries, 2008 and p.11, Figure 7 : Satisfaction with Democracy, 19 Countries, 2008 に基づいて筆者が作成。

(注) 「変化」は第1回調査と第4回調査の差を示している。第1回調査から第3回調査の「平均」のカッコ内はジンバブエを除いた11か国の平均。第1回調査のガーナの「民主主義の程度」で、回答者は、「はい、民主主義国です (Yes, it is a democracy)」、「いいえ、民主主義国ではありません (No, it is not a democracy)」から選択するよう求められた。

次に、民主主義に対する支持が改善した理由を検討していこう。第1に、民主主義に対する支持と「現在の国民経済への評価」など説明変数との相関についてみていこう。チュ (Yun-han Chu、アジアバロメーター会長)、ブラットン (アフロバロメーター共同会長[当時])、ラゴス (Marta

Lagos、ラテンバロメーター会長)、シャストゥリ (Sandeep Shastri、南アジア民主主義プロジェクト設立メンバー)、テスラー (Mark Tessler、アラブバロメーター会長) が、当初『ジャーナル・オブ・デモクラシー (Journal of Democracy)』に執筆し、その後、ダイヤモンドとプラットナー (Marc F. Plattner) が編集した『人々は民主主義をどのように見ているのか』に再録された論文「世論と民主主義の正統性」でグローバルバロメーターのデータに基づいて、これを行っている⁽¹³⁾。

チュらが、取り扱っているアフロバロメーターのデータは第3回調査のものである。チュらは、民主主義に対する支持と9つの説明変数(現在の国民経済への評価、現在の自身の経済への評価、政党への信頼、議会への信頼、裁判所への信頼、市民へのエンパワーメント、自由で公正な選挙、平等な権利、民主主義に対する満足)の相関分析を行ったが、いずれの説明変数も相関が低いという結果となった。その中で、相関が最も高かったのは、民主主義に対する満足との間で、相関係数は0.18であり、次いで、議会、裁判所、政党という「政治機関への信頼」であった⁽¹⁴⁾。チュらは、「民主主義への満足」は「包括的な評価なので、リストに載せられたすべての要因の累積的な影響を含んでいるかもしれない⁽¹⁵⁾」と述べている。なお、9つの説明変数のすべてについて相関が低いということは、他により相関の高い説明変数があるか、民主主義に対する支持が他との高い相関をとらない根源的な価値である可能性を示唆しているように思われる。

第2に、プラットンとマテスの議論をみていこう。プラットンらは、「世論の方向性が変化した理由は不明である」と述べた上で、まず、資源価格の高騰によるアフリカ諸国の経済の回復をその理由として示唆するが、続けて、「2008年の民主主義に対する支持は、その前の1年間のマクロ経済情勢の改善に関する認識と弱い相関して有していない」としている。そして、それよりも有力な議論として、政治改革が根付きつつあると市民が認識していることをあげている。与党の交代を含む数度の競争的選挙の後、市民は指導者を選択する彼らの権利の制度化に信頼を持ちつつあるとプラットンらは言っている⁽¹⁶⁾。

ここまでの検討の結果、民主主義に対する支持が10年前の水準を回復したことが明らかになったが、その理由は明確にはなっていない。

第2節 民主主義の制度

アフロバロメーターの第3回調査と第4回調査は、「あなたの意見では、あなたの国は今日どのくらいのレベルの民主主義国ですか (In your opinion, how much of a democracy is [your country] today?)」と質問し、「完全な民主主義国 (a full democracy)」と「小さな問題を伴う民主主義国 (a democracy, but with minor problems)」の割合の合計を「民主主義の程度 (extent of democracy)」として示している⁽¹⁷⁾。第1回調査も、第2回調査も、ほぼ同じ文言で質問・回答をしている⁽¹⁸⁾。この「民主主義の程度」は、民主主義の供給の一構成要素であるが、制度に対する評価であり、重要である。第4回調査の対象20か国のうち、ジンバブエを除く19か国で、「民主主義の程度」は59%、最上位はボツワナ (91%)、以下、ガーナ (83%)、ベナン (76%)、タンザニア (74%)、ナミビア (73%)、カーボ・ヴェルデ (64%)、最下位はマダガスカル (36%)、以下、セネガル (37%)、

レソト（37%）となっている⁽¹⁹⁾。

第1回調査の対象12か国の「民主主義の程度」は表2の通りであり、第1回調査が55%、第2回調査が53%、第3回調査が48%と低下していた。ジンバブエを除いた11か国で比較すると、第1回調査が68%、第2回調査が54%、第3回調査が51%と低下していたが、第4回調査は62%と改善している⁽²⁰⁾。

「民主主義の程度」は、「民主主義に対する満足」に比べて、より長期的な視野に立ち、自国の民主主義を評価するものであり、従って、我々は、中長期的には、安定したものになるとの仮説を立てていたが、実際には、調査ごとに変動していた。これを受けて、我々は、「民主主義の程度」は、選挙に対する評価から強い影響を受けているとの仮説を立て、表3を示した。アフロバロメーター調査は、「あなたは、直近の国政選挙の自由さと公正さを全体としてどのように評価しますか（On the whole, how would you rate the freeness and fairness of the last national election held in [2001]?)」と質問し、「完全に自由で公正（completely free and fair）」と「小さな問題を伴うが、自由で公正（free and fair, but with minor problem）」の合計を「自由で公正な選挙（elections free and fair）」として示している。「自由で公正な選挙」が調査されていない第2回調査を除いた3回の調査すべてで、「自由で公正な選挙」と「民主主義の程度」は、一方の値が高い時、他方の値も高いというように正の相関を示している。時系列の推移は、ここ10年の傾向として、両者がともに低下してきていたが、第4回調査で上昇に転じていることを示している。直近の国政選挙に対する評価が、調査の時点で形成されるというよりも、選挙の時点で形成されるであろうということを考えると、影響の方向は、「自由で公正な選挙」から「民主主義の程度」へであると考えられる。

表3 自由で公正な選挙と民主主義の程度（12か国の平均）（単位：%）

	第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査
自由で公正な選挙	67(70)	—	62(68)	68
民主主義の程度	50(57)	49(50)	48(53)	63

（出所）The Afrobarometer Network, 2002, p.17, Table 1-6 : Satisfaction with Democracy ; The Afrobarometer, 2004, p.37, Table 3.4 : Supply of Democracy; Zimbabwe, p.16, Table 13 : Extent of Democracy ; Afrobarometer, No.40, p.7, Figure 8 : Extent of Democracy, 2005-2006 and p.8, Figure 10 : Quality of Elections, 2005-2006 ; The Afrobarometer Network, 2009, p.7, Table 1.1 : Demand for Democracy and p.9, Table 1.3 : Supply of Democracy に基づいて筆者が作成。

（注）「民主主義の程度」のカッコ内は、ザンビアとジンバブエを除いた10か国の平均である。第2回調査の概要レポートは「自由で公正な選挙」に関するデータがない。なお、第1回調査は、「直近の国政選挙はどのくらい正当なものでしたか（How honest were the last national elections ?）」と質問し、「非常に正当（very honest）」と「正当（quite honest）」の合計を「自由で公正な選挙」としている。

国別のデータでも、各調査で、両者の値は比較的近いものとなり、時系列の変化も類似したのになっている。これは表4に示した。

表4 各国別の自由で公正な選挙と民主主義の程度（単位：%）

	第1回調査		第2回調査		第3回調査		第4回調査		変化	
	選挙	程度	選挙	程度	選挙	程度	選挙	程度	選挙	程度
ボツワナ	83	82	—	70	84	73	86	90	+ 3	+ 8
ガーナ	62	69	—	76	77	71	83	83	+19	+14
レソト	54	37	—	48	79	44	58	37	+ 4	0
マラウイ	63	62	—	38	43	28	64	56	+ 1	- 6
マリ	55	45	—	63	64	58	68	60	+13	+15
ナミビア	78	71	—	60	77	73	81	73	+ 3	+ 2
ナイジェリア	76	50	—	32	32	28	31	42	-45	- 8
南ア	73	60	—	47	75	64	72	58	- 1	- 2
タンザニア	80	50	—	63	79	39	90	74	+10	+24
ウガンダ	79	48	—	63	67	49	50	54	-29	+ 6
ザンビア	67	63	—	38	29	32	—	—	—	—
ジンバブエ	31	27	—	36	36	14	—	—	—	—
平均	67 (70)	50 (57)	—	49 (50)	62 (68)	48 (53)	68	63	- 2	+ 6

（出所）表2と同じ。

（注）各調査の左側が「自由で公正な選挙」、右側が「民主主義の程度」である。カッコ内は、ザンビアとジンバブエを除いた10か国の平均である。「変化」は第1回調査と第4回調査の差を示している。第2回調査では「自由で公正な選挙」は調査されていない。

第3節 民主主義の機能

アフロバロメーター調査は、「全体として、あなたはあなたの国で民主主義が機能している方法にどのくらい満足していますか (Overall, how satisfied are you with the way democracy works in [your country]?)」と質問し、「おおむね満足している (fairly satisfied)」と「非常に満足している (very satisfied)」の割合の合計を「民主主義に対する満足 (satisfaction with democracy)」として示している⁽²¹⁾。第4回調査の対象20か国のうち、ジンバブエを除く19か国で、「民主主義に対する満足」は49%、最上位はボツワナ(83%)、以下、ガーナ(80%)、タンザニア(71%)、ベナン(69%)、ナミビア(67%)、最下位はマダガスカル(16%)、以下、セネガル(27%)、レソト(30%)となっている。

「12か国レポート」対象国の「民主主義に対する満足」は、第1回調査が58%、第2回調査が52%、第3回調査が45%と低下していた。ジンバブエを除いた11か国で比較すると、第1回調査が61%、第2回調査が55%、第3回調査が48%と低下していたが、第4回調査は56%と改善している。

「民主主義に対する満足」に関し、国別にデータをとると表2のようになる。ナイジェリアの第4回調査が第1回調査と比較して53%も下回り、これが全体のデータに大きく影響している。第1回調査と比較して、ガーナ、タンザニア、ボツワナなどで支持が上昇し、タンザニア、マラウイ、ボツワナ、ガーナで第3回調査から支持を大幅に上昇させている。一方、ナイジェリア、ウガンダ、マリは、第1回調査と比較して支持を大幅に低下させ、南ア、レソト、マリは第3回調査から支持を大幅に低下させている。

第2節で、チュらが「民主主義に対する支持」の相関分析を行い、「民主主義に対する満足」との相関が大きいことが明らかとなったことを示したが、チュらは、民主主義に対する満足に関しても、9つの説明変数（現在の国民経済への評価、現在の自身の経済への評価、政党への信頼、議会への信頼、裁判所への信頼、市民へのエンパワーメント、自由で公正な選挙、平等な権利、腐敗の統制）との間の相関分析をしている。「民主主義に対する満足」は、「自由で公正な選挙」との相関が最も高く、相関係数は0.41、以下、議会、政党、裁判所という「政治機関への信頼」、「現在の国民経済への評価」、「腐敗の統制」となっている⁽²²⁾。「民主主義に対する支持」の場合と異なり、「現在の国民経済への評価」との相関係数が0.29と比較的高く、9つの説明変数中4位となっはいるものの、「自由で公正な選挙」というそれ自体民主主義の中核部分にあたるものや、ガバナンスに関わるものが、上位にきているという点で、全体的には「民主主義に対する支持」との相関との共通性が高い。

チュらは、ほとんどの新興民主主義地域の人々は政権の業績の政治的側面と経済的側面を区別でき、彼らの多くは政治財 (political goods) としての民主主義に価値を置いていているとしている⁽²³⁾。チュらは、より具体的には、「人々による、正統なものとしての民主主義の受容は、主に、いくつかの鍵となる政治機関が市民の信頼を得るかや、政治システムが自由で公正な選挙、法の下での平等の提供、合法的な方法で政府を変更する市民のエンパワーメントのような自由民主主義に基本的に必要なものを満たすことができるかにかかっている⁽²⁴⁾」と結論付けている。

アフリカに関して、マテス (Robert Mattes) とブラットンは、アフリカ人が政治的領域・経済的領域の双方での政府の業績に不満であっても民主主義を支持していることを明らかにしているが、チュらによれば、これは、アフリカにおける民主主義に対する支持が手段的 (instrumental) 支持ではなく、本質的 (intrinsic) 支持という基準に基づいているからである。さらに、チュらは、マテスとブラットンは、民主主義に対する支持や満足が業績に基づいている場合でも、経済財 (economic goods) の供給よりもより多く政治財の供給に関する政府の業績に基づいていることを明らかにしていると述べている⁽²⁵⁾。

第4節 民主主義の理念・制度・機能の関係

ここまで、民主主義の理念・制度・機能の各々について検討してきた。本節では、この三者の関係について検討していく。「12 개국レポート」対象国のデータは既に表2に示したが、ジンバブエを除く11か国の平均のみ再度表5に示しておく。その特徴は、第1に、「民主主義に対する支持」、「民主主義の程度」、「民主主義に対する満足」は、すべて、第1回調査から第3回調査にかけて下落していたが、第4回調査で上昇しているということである。第2に、第2回調査の「民主主義の程度」と「民主主義に対する満足」の関係を例外として、「民主主義に対する支持」の割合が最も高く、次いで「民主主義の程度」の割合で、「民主主義に対する満足」の割合が最も低いということである。第3に、「民主主義に対する支持」は第1回調査の水準を回復したのに対し、「民主主義の程度」と「民主主義に対する満足」はこれを回復していない。第4に、「民主主義に

対する支持」の割合と「民主主義に対する満足」の割合の差は第1回調査から9%、11%、13%、15%と拡大してきている。

表5 民主主義に対する認識（11か国の平均）

	第1回	第2回	第3回	第4回
民主主義に対する支持	70%	66%	61%	71%
民主主義の程度	68%	54%	51%	62%
民主主義に対する満足	61%	55%	48%	56%

（出所）表2と同じ。

さて、我々は、以下で、主に、「民主主義に対する支持」の高まりの理由を検討していきたい。我々は、この理由が「大衆の民主主義に対する信頼の高まり」であると考えている。本稿では、既に、第2節において、「民主主義に対する支持」の高まりの理由を同様に説明するブラットンらの議論を紹介し、さらに、第3節では、「民主主義の程度」と「自由で公正な選挙」が正の相関を持つことを検証している。

「民主主義に対する支持」の高まりが「大衆の民主主義に対する信頼の高まり」に基づくという議論は大きく2つに分れる。第1に、「民主主義に対する支持」の高まりの一部は、「民主主義の程度」や「民主主義に対する満足」の高まりと相互依存的に表れてきている。第2に、「民主主義に対する支持」の高まりの要因の一部は、「民主主義の程度」や「民主主義に対する満足」には当てはまらないが、「大衆の民主主義に対する信頼の高まり」に関わるものである。我々がこのように考えるのは、これら三者すべてが第4回調査で割合を高めている一方、「民主主義に対する支持」の割合は他の2つの指標や第1回から第3回の調査の「民主主義に対する支持」の割合から変化の度合いが大きいからである。

まず、第1の要因から検討していく。我々は、既に、第2節で、チュラの議論に基づいて、「民主主義に対する支持」と「民主主義に対する満足」の相関が大きいことを明らかにした。それは、表5でも示される。また、表5は、「民主主義の程度」と「民主主義に対する満足」が正の相関を示すことを明らかにしている。「民主主義の程度」と「民主主義に対する満足」の正の相関は国レベルだけでなく、個人のレベルでも生じている。第4回調査の対象19国の調査対象者22,800人のうち、「民主主義に対する満足」を感じた人の81%が「民主主義の程度」（自国を「完全な民主主義国」ないしは「小さな問題を伴う民主主義国」と考えること）を感じているのに対して、「民主主義に対する満足」を感じていない人では37%しか「民主主義の程度」を感じていない⁽²⁶⁾。これは表6に示した。さらに、表5は、「民主主義に対する支持」と「民主主義の程度」が正の相関を示すことも明らかにしている。つまり、表5は三者が正の相関にあり、相互依存的であることを示している。

表6 「民主主義に対する満足」による「民主主義の程度」の交差表（第4回調査）

	「民主主義に対する満足」ではない	「民主主義に対する満足」
「民主主義の程度」ではない	63%	19%
「民主主義の程度」	37%	81%

(出所) Afrobarometer, No.67, p.11, Figure8 : Cross-tabulation of Extent of Democracy by Satisfaction with Democracy, 2008.

次に、この三者が「大衆の民主主義に対する信頼の高まり」と相関関係にあることを再確認しておく。第2節で検討したように、「民主主義に対する支持」は、「民主主義に対する満足」に次いで、議会、裁判所、政党というような「政治機関への信頼」との相関係数が大きかった。ただし、「民主主義に対する満足」との相関係数は0.18と低いものであった。また、第3節で検討したように、「民主主義の程度」は「自由で公正な選挙」と正の相関を持つ。さらに、第4節で検討したように、「民主主義に対する満足」は、「自由で公正な選挙」との相関が最も高く、次いで、議会、裁判所、政党というような「政治機関への信頼」となっている。このようなことから、我々は、「民主主義に対する支持」、「民主主義の程度」、「民主主義に対する満足」の高まりをもたらした共通の要因は、「大衆の民主主義に対する信頼の高まり」であり、これが「民主主義に対する支持」の高まりの要因の大半であると考えている。

だが、これだけでは、「民主主義に対する支持」の高まりが、「民主主義の程度」や「民主主義に対する満足」の高まりよりもより高いということを説明できない。そこで、我々は、第2の要因の検討に入る。それは大衆の「期待」である。これは予測と言い換えることが可能である。「民主主義の程度」や「民主主義に対する満足」は、大衆の過去と現在に対する考え方を反映しているが、「民主主義に対する支持」は大衆の過去と現在に対する考え方に加えて、未来に対する考え方も反映していると考えている。そして、予測は、直近の変化の方向性が継続するという形で立てられると我々は考えている。第3回調査時よりも第4回調査時に、大衆は民主主義に関する認識を改善しているが、このような変化が今後も継続するという「期待」が「民主主義に対する支持」を高めた要因の一部であると我々は考えている。

「民主主義に対する支持」と「民主主義に対する満足」の関係に、さらに、検討しよう。ブラットンらは、両者の関係を表7のように分類した。ブラットンらは、「12か国レポート」の12か国からジンバブエを除いた11か国の「満足していない民主主義者」の割合が第3回調査の34%から第4回調査では41%に増加していることを指摘している⁽²⁷⁾。表2の「民主主義に対する支持」と「民主主義に対する満足」のデータを合わせると、表7のような分類になる⁽²⁸⁾。これは、第1に、民主主義の維持・定着のために最も望ましいと考えられる「満足した民主主義者」が27%から30%へと、若干増加したことを示している。第2に、民主主義の維持・定着のために最も望ましくないと考えられる「満足していない非民主主義者」が18%から3%へと、大幅に減少している。第3に、「満足していない民主主義者」が34%から41%へと、大幅に増加している。これを、ネガティブに解釈すれば、「民主主義に対する支持」の増加分である全体の10%分のうち、3%分しか民主主義に満足していないということなるが、ポジティブに解釈すれば、7%分の人々は、民

民主主義に不満を感じているにもかかわらず、民主主義を支持しているということになる。このような人々が「満足していない非民主主義者」にならず、「満足していない民主主義者」であることが民主主義の維持・定着のためには重要である。その一方で、中長期的には、「満足していない民主主義者」を「満足した民主主義者」にすること、つまり、「民主主義に対する満足」を高めることが必要である。

表7 民主主義に対する支持と満足の交差表

(「12か国レポート」の対象国からジンバブエを除いた11か国)

		民主主義に対する満足	
		はい	いいえ
民主主義に対する支持	はい	満足した民主主義者 (satisfied democrats) 57%→27%→30%	満足していない民主主義者 (dissatisfied democrats) 19%→34%→41%
	いいえ	満足した非民主主義者 (satisfied non-democrats) 12%→21%→26%	満足していない非民主主義者 (dissatisfied non-democrats) 12%→18%→3%

(出所) Michael Bratton, *Wide but Shallow: Popular Support for Democracy (Afrobarometer Working Paper, No.19)*, August 2002, p.5, table 2: Cross-tabulation of Support for, and Satisfaction with, Democracy; Afrobarometer, No.67, p.12; 本論文の表2に基づいて筆者が作成。

(注) 各ボックスの数字の左端は第1回調査、中央は第3回調査、右端は第4回調査である。第1回調査はジンバブエを含めた12か国である。第2回調査のデータは明らかにされていない。

「民主主義に対する満足」が低いのは、ブラットンらが指摘しているように、アフロバロメーターが調査している政権の多くは「選挙民主主義 (electoral democracy)」であるからである。それは、選挙のような制度的形態としては民主主義的であるが、人権やアカウンタビリティというような民主主義に不可欠ないくつかの属性を欠いている⁽²⁹⁾。第4回調査で、「民主主義に対する満足」が増加したのは、調査対象者が民主主義の機能の改善を認めたからであり、「民主主義に対する支持」の高い増加は、今後もそのような状況が継続するとの「期待」に基づく。一方、例えば、2009年暦年を対象とした「フリーダム・ハウス」の『フリーダム・イン・ザ・ワールド 2010』は、「過去20年間ほどにアフリカでなされた進歩が全体的に侵食されたわけではないが、15か国が悪化を記録し、4か国だけが改善を記録した同地域は、2009年に、世界で最も大きな後退を経験した」と述べ、2009年を「大きな後退の年⁽³⁰⁾」としているように、客観的な分析を標榜するデータでは、これを確認するようなものは現時点では出てきていない。これについては、今後の動向に注目したい。

おわりに

これまでの議論を整理しよう。まず、第3回調査と比較して、第4回調査では、「民主主義に対する支持」、「民主主義の程度」、「民主主義に対する満足」は大幅に上昇した。これら三者の上昇は、「大衆の民主主義に対する信頼の高まり」を要因としている。「民主主義に対する支持」に注目すると、その上昇は、「民主主義の程度」や「民主主義に対する満足」と共通する要因以外に、このような変化が今後も継続するという「期待」も要因であることを明らかにした。

今後の展望との関連では、「民主主義に対する支持」の増加ほどには「民主主義に対する満足」は増加しておらず、その結果、「満足していない民主主義者」が増加していることを示した。さらに、民主主義の維持・定着のためには、「民主主義に対する満足」を高めることが必要であり、アフロバロメーターの第4回調査はそのような方向性を示唆していることを示した。

注

- (1) The Afrobarometer Network, *Afrobarometer Round I : Compendium of Comparative Data from a Twelve-Nation Survey (Afrobarometer Working Paper, No. 11)*, March 2002, p.1. (以下、「The Afrobarometer Network, 2002」と表記)。
- (2) *Ibid.*, ii-iii; The Afrobarometer Network, *Afrobarometer Round II : Compendium of Comparative Results from a 15-Country Survey (Afrobarometer Working Paper, No. 34)*, March 2004, 頁番号なし [表紙の次の頁]。 (以下、「The Afrobarometer Network, 2004」と表記) ; <http://www.afrobarometer.org/core.html>; <http://www.afrobarometer.org/natl.html>; <http://www.afrobarometer.org/supporunits.html>。上記 3 つは 2008 年 7 月 27 日にダウンロード。
- (3) <http://www.afrobarometer.org/advisory.html>。2008 年 7 月 27 日にダウンロード。
- (4) <http://www.afrobarometer.org/funds.html>。2008 年 7 月 27 日にダウンロード。
- (5) The Afrobarometer Network, 2004, i.
- (6) The Afrobarometer Network, 2002, p.3; The Afrobarometer Network, 2004, pp.1-4; The Afrobarometer Network, *Citizens and the State in Africa : New Results from 18 Afrobarometer Round 3 (Afrobarometer Working Paper, No. 61)*, May 2006, p.5. (以下、「The Afrobarometer Network, 2006, Citizens」と表記); The Afrobarometer Network, *The Quality of Democracy and Governance in Africa: New Results from Afrobarometer Round 4, A Compendium of Public Opinion Findings from 19 African Countries, 2008 (Afrobarometer Working Paper, No. 108)*, May 2009, pp.4-5. (以下、「The Afrobarometer Network, 2009」と表記)。
- (7) The Afrobarometer Network, *Where is Africa Going? Views from Below : A Compendium of Trends in Public Opinion in 12 African Countries, 1999-2006 (Afrobarometer Working Paper, No.60)*, May 2006. (以下、「The Afrobarometer Network, 2006, Where」と表記)。
- (8) The Afrobarometer Network, 2009, pp.3-4. これに関しては、以下も参照。鈴木亨尚「アフリカの民主化に対する構成主義アプローチ—アフロバロメーターの分析を中心として—」(星野昭吉編『グローバル政治とグローバル・ガバナンス』テイハン、2007年) 135~160頁。

- (9) The Afrobarometer Network, 2006, Where, p.17; The Afrobarometer Network, 2009, p.7. 第2回調査と第4回調査では、「不同意・強い不同意 (disapprove/strongly disapprove)」という語を用いている。
- (10) The Afrobarometer Network, 2009, p.7; Afrobarometer, *Neither Consolidating Nor Fully Democratic : The Evolution of African Political Regimes, 1999-2008* (Afrobarometer Briefing Paper, No.67), pp.5-6. (以下、「Afrobarometer, No.67」と表記)。
- (11) Afrobarometer, No.67, p.8. タイトル・ページに、著者として、ブラットンとマテスの名前は示されていないが、文末に、「この『アフロバロメーター速報』はマイケル・ブラットン (ミシガン州立大学) とロバート・マテス (ケープタウン大学) によって作成された」と書かれているので、両者を執筆者として扱う。なお、この論文では、第4回調査のザンビアに関するデータが記載されているので、本論文ではこれを利用している。
- (12) Larry Diamond, *Developing Democracy : Toward Consolidation* (Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1999), p.68.
- (13) Yun-han Chu, Michael Bratton, Marta Lagos, Sandeep Shastri, and Mark Tessler, “Public Opinion and Democratic Legitimacy,” in Larry Diamond and Marc F. Plattner, eds., *How People View Democracy* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2008), pp.31-44. グローバルバロメーターについては、鈴木亨尚「新興民主主義地域の民主化の比較研究—グローバルバロメーターの分析を中心として—」(星野昭吉編『世界政治の展開とグローバル・ガバナンスの現在』テイハン、2010年) 157~179頁を参照。
- (14) Yun-han Chu, Michael Bratton, Marta Lagos, Sandeep Shastri, and Mark Tessler, *op.cit.*, p.36.
- (15) *Ibid.*, p.37.
- (16) Afrobarometer, No.67, p.7.
- (17) The Afrobarometer Network, 2006, Where, p.19; The Afrobarometer Network, 2009, p.9.
- (18) The Afrobarometer Network, 2002, p.17; The Afrobarometer Network, 2004, pp.36-37.
- (19) Afrobarometer, No.67, p.9.
- (20) The Afrobarometer Network, 2006, Where, p.19; The Afrobarometer Network, 2009, p.9; Afrobarometer, No.67, p.9.
- (21) The Afrobarometer Network, 2006, Where, p.19.
- (22) Yun-han Chu, Michael Bratton, Marta Lagos, Sandeep Shastri, and Mark Tessler, *op.cit.*, p.40.
- (23) *Ibid.*, p.42.
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.*, p.32. チュらが引用しているのは以下の文献である。Robert Mattes and Michael Bratton, “Support for Democracy in Africa: Intrinsic or Instrumental?” *British Journal of Political Science*, Vol.31, July 2001, pp.447-74; Robert Mattes and Michael Bratton, “Learning About Democracy in Africa: Awareness, Performance, and Experience,” *American Journal of Political Science*, Vol.51, January 2007, pp.192-217. 鈴木亨尚「アフリカの民主化に対する構成主義アプローチ—アフロバロメーターの分析を中心として—」、149~150頁も参照。
- (26) Afrobarometer, No.67, pp.10-11.
- (27) *Ibid.*, p.12.
- (28) The Afrobarometer Network, 2006, Where, p.17; The Afrobarometer Network, 2009, p.7; 本論文の表2。ただし、第1回調査の結果は、ザンビア、ジンバブエを含む12か国のものである。
- (29) Afrobarometer, No.67, p.16.
- (30) Arch Puddington, *Freedom in the World 2010 : Erosion of Freedom Intensifies*, Freedom House, 2010, p.7.